

グリーン・ツーリズムの教育的価値

—「農」がニート青年を甦らせる—

大塚 清恵

(2005年10月18日 受理)

A Study of Green Tourism as an Attempt to Revive NEET Youth

OTSUKA Kiyoe

To Isis and Osiris

要 約

現在、日本でサステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）として注目されているグリーンツーリズム（農山漁村滞在型観光）は、ニート青年を立ち直らせるオータナティブ教育として、また都会の子供たちに自然や食べ物のありがたさを体験をとおして学ばせる食育として注目を集めている。この論文では、日本の観光史を概説しニート問題を心理面から分析した後、グリーンツーリズムが都会育ちの若者や子供たちを活性化することに成功したいくつかの事例を紹介する。

キーワード：グリーン・ツーリズム，ラーニング・バケーション，ワーキング・ホリデー，ニート

序 研究動機

私が所属する国際理解教育科の学生は観光関連企業（航空会社・旅行代理店・ホテル・テーマパーク等）に就職するものが多く、そのような学生はたいてい卒論のテーマとして観光関連問題を取り上げる。私自身、学生時代に英語通訳ガイドの免許を取得し外国人旅行者の日本縦断旅行の手伝いをした経験があり、「観光」というものにたいして大いに興味があったので、4年前「観光学」講座を開いた。形式的には講義だが、受講生全員に国内と海外の旅行企画を立てさせ毎回一人ずつ10分～15分以内で自分の作った旅行プランを授業中に発表させた。個性豊かな学生たちのこと、さぞや個性的で型破りな旅行企画を立ててくるだろうと期待していたのだが、提出された旅行プランはどれも旅行業者が一般向けに販売しているパッケージツアーと同じようなものばかりで少し落胆した。物見遊山だけの旅はつまらない。プランナーの個性と情熱、何かに対する強いスペシャル・イ

ントレストが伝わってくるような企画でないと他人を惹きつけることはできない。現代人は、万人向けに商品化された旅ではなく、旅行者一人一人の属性・欲求に合う感動的な「本物の旅」を求めている。

私は、所属学科の学生たちの就職活動や卒論書きの一助ぐらいの軽い気持ちで観光学を始めたのだが、すぐに本物の旅とは何か、いい旅とは何かという壁にぶつかった。

同時に私がぶつかったもう一つの壁は、最近の学生たちの就労意欲の低さであった。年々、無業者のまま卒業していく学生が増加している。私は、自ら進んで就職委員の仕事を引き受けたのだが「拒職症」の学生たちを変えることはできなかった。学生側に、卒業後うけた専門教育を生かせるような仕事に就こうという意志が端からないのならば、教える側も張り合いがない。入学当初から「就職しない」とはっきり言う学生もいる。彼らにとって大学は思い出づくりや恋人探しの場にすぎないのだろう。15年前、教育社会学者の深谷昌志が指摘しているとおおり、最近の若者と子供たちの間では「無気力化」と「孤立化」が進行している。このままでは確実に日本の社会は衰退していくだろう。ニートを減少させるための対策として弱体化した若年層をエンパワーする「何か」を教育の中に導入しなくてはならない。大人たちが言葉で論理的に指導しようとする、それは若者や子供たちをかえって追い詰めてしまうことになる。頭を使わせる活動は、彼らの生きるエネルギーを消耗させるだけだ。頭でなく体で考えさせる。言葉を捨てて、疲れ果てるまで体を動かさせる。そして、生きている喜びを感じさせる。そんな経験学習が、若者や子供たちに生命力をふきこんでくれると思う。あてがわれた教育ではなく「本物の教育」とは、青年や子供たちが自分たち主体でおこなうものだ。

「本物の旅」とは何かという問題とニートの問題が重なったとき、私の頭の中で観光教育としてのグリーン・ツーリズムが浮かんできたのである。

第一章 日本の観光の変遷

江戸時代

江戸時代の日本においては、楽しみを目的とした旅行は原則として認められていなかった。各藩は「関所」を要所に設けて民衆の物見遊山や他藩への旅行をできるかぎり抑制した。が、医療目的の旅「湯治」と信仰目的の旅「社寺参拝」は例外として認められていたため、一般民衆はこれらを表向きの理由としてかかげて遠隔地への遊覧の旅を楽しむようになった。江戸後期には、景勝地を豊富な絵図によって紹介した旅行者のためのガイドブック「名所図会」が続々と刊行されるようになり、『東海道中膝栗毛』のようなユーモラスな旅行記が庶民の人気を博したり「伊勢参り 大神宮にもちょっと寄り」という江戸川柳が詠まれるほど社寺参拝を口実とする観光旅行が盛んにおこなわれるようになった。そのひとつの要因は「講」制度の発達であった。これは、社寺参拝目的の旅をするための相互扶助組織で加入者が資金を出しあい、輪番で参拝できるようにする制度であった。伊勢参宮は日本人なら一生に一度はすべきものとされ、正規の手段としては講に加入して旅行

費用を積み立て参宮経験がある年長者をリーダーとして、講加入者は順番に旅をした。そのような形での参宮は「本参り」と呼ばれた。これに対して、使用人・奉公人などが家長・主人の許しを得ないで勝手に伊勢参りすることは「抜け参り」と呼ばれた。抜け参りは、1650年に突如として大流行し、その後、やく60年の周期で集中発生した。このような抜け参りの集中発生現象を「おかげ参り」と呼ぶ。これは、“おかげ”がいただけるありがたい年に大群衆が参宮するのが特徴で、その年には、伊勢神宮のお札が降ると信じられていた。また、伊勢神宮への沿道では、参拝者に対して多くの施しがなされ、世間のおかげで参宮できるという意味からも「おかげ参り」と呼ばれたといわれている。

60年周期、つまり一生に一度の割合で、江戸時代の民衆が封建社会の厳しい掟を破ってでも大旅行に出かけたという事実は、人間の旅への欲求がいかに抑えがたいものであるかを証明していると言えよう。藩主が原則としては禁止しておきながらも、事実上、庶民に観光の旅を許したのは緊張を解除し暴動を回避するためであったかもしれない。観光は人間のさまざまな欲求とかかわっている。アメリカの心理学者マズローの有名な「欲求段階説」においては、人間の欲求は生理的レベル→社会的レベル→自己実現レベルと階層をなしているとされているが、観光行動はすべてのレベルの欲求から生起する。観光欲求が満たされないと人間は強い欲求不満状態に陥る。また、旅せずして、自分の日常生活圏を外部から見直したり、未知のものにふれて自己拡大を図ることは不可能である。現代の学校教育のなかに、遠足・修学旅行以外にもっと積極的に「旅」をとり入れることが子供たちの心の教育になるのではないだろうか。

明治時代～太平洋戦争まで

明治維新後は、関所等の自由な移動を制約する障害が撤廃され、日本人は堂々と楽しみのための旅行ができるようになった。娯楽目的の周遊旅行は、江戸時代には「漫遊」と呼ばれたが、明治期には「観光」と呼ばれるようになった。観光の語源は、周の時代に中国で著された易学書『易経』のなかの「観国之光」という言葉に由来する。「観」には“見る”と“見せる”の両義があり、「光」は美しい風景や財宝、すぐれた文物、誇示するに値する他より優れた見事なものの総称である。つまり「観光」とは「他の国に優れたものを見る」という視察の意味と「自国の優れたものを見せる」という誇示・誘致の意味がある。

明治5年に、新橋・横浜間に初めて鉄道が敷かれ、その後の鉄道網の発達が移動時間を飛躍的に短縮した。旅館も鉄道の普及とともに着実に増加していった。来日外国人のための宿泊施設として慶応3年（1867年）江戸・築地に「ホテル館」が建設され、その後、オリエンタルホテル・日光金谷ホテル・富士屋ホテル・帝国ホテルなどのクラシックなホテルの建設が続いた。

明治26年には、ジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）の前身である「喜賓会」が政府の外国人旅行者接遇機関として創られ、明治38年には初の民間旅行業者「日本旅行」が誕生した。

従来の温泉旅行や寺社めぐりにくわえて、修学旅行や新婚旅行なども行われるようになった。旅の自由化、交通機関の発達、宿泊施設の整備、旅行業者の出現、旅行情報の流布、一般大衆の旅への関心の高まりなどが、日本の観光を大きく進展させた。ただし、海外旅行だけは依然としてごく一部の特権階級の人々による視察旅行や留学にかぎられていた。

戦後：マスツーリズムの時代

戦後は、まず教育観光である修学旅行が復活し、国内団体旅行が盛んに行われるようになった。東京オリンピックが開催された1964年にはついに海外旅行が自由化された。その後は、経済の高度成長に比例して、日本人の旅行需要は急成長した。東海道新幹線の開通、高速道路網の整備、巨大ホテル建設、マイカーの普及によるモータリゼーション等が国内旅行を容易にただけでなくそのスタイルを大きく変化させた。旅行形態は、次第に団体旅行から個人・小グループ旅行へと変わっていったが、旅行業者は逆に個々の旅行者の注文に応じる手配旅行より自ら旅行日程を作成し多数の参加者を募集するパッケージツアーを主に取り扱うようになっていった。

戦後、日本の観光経済は右肩上がりの成長を続け短期間のあいだに巨大化した。1994年の運輸省運輸政策局観光部の統計資料によると、国民の旅行関連支出総額は24.5兆円にたっし、これは民間最終消費支出の9.5%、GDPの5.4%に相当する。世界の観光経済も拡大の一途をたどっており、世界観光機関(WTO)の統計によると2001年に世界各国が受け入れた観光旅行者総数は約6億9,260万人であり、2010年には10億人に近づくと予想されている。

旅行需要の増大に応えるべく80年代は観光資源としてテーマパークが全国各地に建設された。テーマパーク元年と呼ばれる1983年には東京ディズニーランドと長崎オランダ村がオープンした。80年代テーマパーク建設が相次いだ理由は、日本は貿易経済摩擦解除策として内需主導の経済構造への転換をアメリカから迫られ、民間活力による国内消費需要拡大の切り札として出されたのが、「リゾート開発」構想であったせいもある。大資本を有する企業は、ゴルフ場、スキー場、ホテル等を建設し、大規模な観光開発を推し進めながら過疎に苦しむ地方を再生しようとした。

しかし、当然のことながら地域の自然生態系の破壊による環境問題が各地に発生して地域住民の開発反対運動を生起させてしまったうえ、地場産業への経済効果も期待に反してほとんど上がらなかった。そして、1992年のバブル経済の崩壊によって一気に華やかなリゾート開発時代は幕を下ろす。その後はテーマパークの倒産があいつぐ。「宮崎シーガイア」は2,700億円以上の負債を抱えて2001年に倒産し、2,300億円もの資産価値があるにもかかわらずアメリカの「リップルウッド社」にわずか180億円で売却された。その後は、「長崎ハウステンボス」、「会津リゾート」、「日光リゾート」、「北海道トマムリゾート」が次々に破綻の憂き目をみた。一連のリゾート開発政策は、第1次・第2次・第3次産業間および大都市圏と地方間の経済格差是正を目的としていたが、事業が頓挫した結果、開発地域の環境破壊、地元経済への打撃、経済的・社会的・文化的ストックの喪失という負の遺産を残すこととなった。旅行業、宿泊業、運輸業(JAL, JR)も軒並み収益の低さや赤字に苦しんでいる。

21世紀観光：グリーン・ツーリズム

80年代のマス・ツーリズムは、巨額の投資をして造られた大規模観光施設が、一度に多くの観光客を集めて非日常的空間の中で遊ばせ、できるだけ多くの金を落とさせるというものだった。主体性はあくまでも観光客を受け入れる側にあり、観光客はあらかじめ用意されている娯楽を受動的に楽しむだけのレジャーであった。そのため、どのリゾートもすぐに飽きられ、経済的窮地におちいった。

21世紀の脱産業社会における継続性ある観光として注目されているのがグリーン・ツーリズムとエコ・ツーリズムである。両者は混同されやすいが、グリーン・ツーリズムとは農山漁村滞在型余暇活動であり、エコ・ツーリズムとは自然環境を保護しながら自然（風景・野生動植物）や地域住民の伝統的な暮らし方を学ぶ観光を指す。フランスでは、グリーン・ツーリズムを細分化して農村部で過ごす休暇をグリーン・ツーリズム、山間部で過ごす休暇をホワイト・ツーリズム、海岸部で過ごす休暇をブルー・ツーリズムと呼ぶ。わたしが、この論文であつかうグリーン・ツーリズムは、この狭義のグリーン・ツーリズムで、農村観光・農村民泊・農作業体験などを指している。

グリーン・ツーリズムは、小規模・価値・日本的伝統・素朴さ・静寂・精神性・双方向性・継続性・などを特徴とし、20世紀後半のマス・ツーリズムの対峙をなすものだ。グリーン・ツーリズムは、1980年以降にヨーロッパで急速に普及し、近年は日本でも順調に広がりを見せているが、それには、都市人の脱都会志向というプッシュ力と活性化と農業保護を希求する農村側のプル力がうまく一致したからだといわれる。グリーン・ツーリズムが都市住民にもたらすものは、①「農」のあるライフスタイルの享受 ②伝統行事や歴史・文化体験 ③自然・景観体験 ④心身のリフレッシュ ⑤特産物・食の体験 ⑥農業、農村滞在体験 ⑦子供の情操・環境教育であり、農村住民側が得る物は、①「農」を活かしたライフスタイルの創造 ②持続的な収入の確保 ③快適な生活環境の創造 ④多様な人材の交流 ⑤地域資源の多面的価値発見と活用 ⑥農業・農村の多面的機能の理解の促進 ⑦女性や高齢者の社会役割の向上であり、双方に①自己実現 ②個持続的交流 ③個性的体験 ④生身の親密な関係 ⑤非日常性 ⑥非効率性 ⑦計算不可能な成果がもたらされる。

グリーン・ツーリズム研究の先駆者である環境社会学者たちが「グリーン・ツーリズム」で意味したものは単なる緑地帯観光ではなく、「地上のすべての生命の尊重、資源の適正利用、多様性の評価、あるいはすべての生物の相互関連の認識」であり「この基本的認識からくるさまざまな対象（たとえば農業や環境など）のとらえ方、自己の行動の律し方、さらには問題へのアプローチの仕方、いうなれば一人一人の人生観や、ライフスタイルなどにも影響を与える考え方」としている。「農」の多面的価値のひとつに教育性がある。

「観光」にも多様な社会的・文化的価値があり、そのひとつは教育的価値である。観光とは、「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行うさまざまな活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とする」（観光政策審議会答申）のものであり、個人が集団を離れて修業し、新たな人格へと向上する過程である。教育界がいじめ、学力低下、不登校、ひきこもり、少年犯罪増加といった

さまざまな問題を抱え、物の豊かさより心の豊かさが求められている今、疲弊した都会人の心身をリフレッシュし、忘れていた自然との繋がりを思い出させてくれるグリーン・ツーリズムは非常に優れた教育観光であるといえる。

グリーン・ツーリズムを通して日本の観光と教育が結びつき、双方向的に充電しあい、行き詰まりを打開できる可能性がある。

第二章 ニート問題に潜む心理的問題

今年(2005年)、全国の大学書店に『就職がこわい』(精神科医 香山リカ著)という本が山積みされた。その本によると、1992年、高校卒業後、無業になる若者は、8万5000人であったが、2003年には約1.5倍の13万3000人に増加し、就職率は16.6%で過去最低であった。大卒者の場合、無業者の伸び率は高卒をはるかに上回り、1992年には無業者は3万人(6%)であったが、2003年には4倍の12万人(22.5%)にまで増加している。ちなみに就職者は、11年間で35万人から31万人へと減っている。¹ このままの状態が続くと近い将来、大卒者においても無業者数が就職者数を上回るであろう。深刻な就業率低下問題の主な原因は、もちろん長引く不況である。企業も役所も学校も、新卒者採用を減らしたり、雇用凍結をしているからだ。

しかし、それだけではない。香山リカは、ニートが激増しているもう一つの原因は、若者自身にあると見ている。若者たちの精神構造に大異変が起きているのだ。香山リカが見た、「就職」に対する学生たちの反応は異常であった。

これまで見てきた学生のなかには、こちらが「就職……」と口にただけで「やめてやめて」と耳をふさぐ人や、「パニック症候群を起こしそうだ」と実際に顔面蒼白にやりかけた人もいた。(p.59)

私も就職委員をつとめたとき、同じような体験をした。多くの若者は社会を耐えがたい「荒々しい戦場のような所」と感じているようである。

三十代の現役引きこもり男、諸星ノアが2003年に出版した自伝『ひきこもりセキララ』の中で自らの社会への恐怖をこう訴えている。²

まず就職が恐かった。召集令状がきて、自分の意に反して戦場にかり出されるような巨大な恐怖であった。家の外に丸裸で放り出されるような心細さが大きかったと思う。(p.17)

諸星は、自分の就職恐怖の根源は、企業戦士で躰に厳しく神経質で世間体を何よりも気にする父親に対する恐怖にあると自己分析している。諸星が高校卒業後、大学に進学したのは社会に出ることを先延ばしにしたかっただけで、「数年を経て大学4年生になっても、私のメンタリティは高三

の頃とほとんど進歩していなかった」と告白する。そして、父親のコネで楽に入れる就職口を紹介されるが面接を受けに行くと「自分の人生が終わったような気分」になり、結局そこは断ってしまう。

父親との軋轢と将来への不安とに疲れ果てた私は、卒業式後ついに精神的におかしくなった。布団から起きあがれなくなり、一日中大声をあげ、畳をバンバン叩いた。頭の中に親や友人たちがとっかえひっかえ出てきて「なぜ働かないのだ!」と責め立てる姿が浮かぶのである。それを払いのけるために大声を出し、畳を叩いたのだった。必死だった。また太陽の光を浴びるのも辛かった。太陽＝本来働いているべき時間の象徴といった感じで、日の光にも「働け!」と責め立てられているようであった。結果昼間は起きているのが辛くなり、昼夜逆転の生活になった。(pp.19-20)

この異常行動がおさまった後、彼は自分が「去勢された飼い猫」になったような気がしたと言う。何が若者をこうまで弱体化するのか。キャリアカウンセラー小島貴子著『わが子をニートから救う本』によると、ある上場企業で23歳以上の無業の子供がいる率を、製造部門と事務管理部門で比較したところ、製造部門は低く圧倒的に事務管理部門の方が高いという結果がでた。³ しかし、事務管理部門で働く父親は、子供がニートであることを「恥」として、誰にも言わずに隠しているという。小島貴子は、それは「事務管理部門の管理職者は比較的学歴が高く、プライドが高いということ」と関係しているとする。学歴が高くホワイトカラーのいい仕事についている親は、子供にも自分と同等以上の学歴と仕事をもってほしいと願う。その期待に応えられない子供は、自分を卑下し、世間の目に触れないように家にひきこもるようになる。とすれば、高学歴でプライド(=自己愛)の高い親が増えれば増えるほどひきこもり青年も増えることになる。

ひきこもり青年は強い劣等感と高いプライドという相反する感情を自分自身に対して持っている。諸星ノアも自分を「どうせ負け犬」と卑下しながらも、家でせっせと漫画や文章を書き「いつかは」世に出たいと強く願っている。

学歴や生活水準が高くなれば、当然プライドや自己愛がつよくなる。高度経済成長期以後生まれ育った世代の特徴は、異常なまでにプライドと自己愛が強いことで、それが彼らが他者と親密な関係を持ったり、社会に適応することの妨げとなっている。若い世代の自己愛の強さは、たとえば、彼らの異常なまでの容姿に対する気の配り方に表れている。コスメフリークと呼ばれる厚化粧の若者たちは身支度に2時間近くかけ、外出時にはノートぐらいの大きさの鏡を携帯し、所構わず自分の顔をチェックする。教室の中でも突然かばんの中から鏡をとりだし自分の顔を見始めることがある。彼らがおしゃれする目的は、他人をひきつけることではなく、あくまでも「私は美しい」というナルシズムに浸ったり、ちょっと人目を引くためのものなのである。だから、場違いな芸能人のような格好をしていることが多い。が、客観的に自分を見る能力が欠けているのか、当人は自

分が場違いなおかしな格好をしていることに無自覚で、周りの者が親切心から「少し化粧がけばけばしいのでは……」とか「肌を露出しすぎでは……」と忠告すると、激しく怒る。彼らは「私は完璧」という幻想の中で生きているのだ。その幻想を守るために嘘をつくことも多い。一目でにせものわかる付け睫毛や付け爪をしても「これは本物よ！」と言い張る。

どうしても変えることができない自分の容姿の欠点は、絶対に考えないことにしている。誰かが自分の容姿の欠点にふれたり、あるいは思い出させるようなことを言っただけで、ひどく怒ったり落ち込んだりする。それが原因で私は去年まで開いていたアジア系アメリカ人作家の小説を講読する授業を休止せざるをえなくなった。小説の中では、必ず登場人物の容姿が言葉でくわしく書かれているからだ。登場人物と同じ容姿の欠点（例えば、肌が黒い、目が一重で小さい、顔が丸く大きい、背が低い等）を持っている学生は、容姿記述の箇所では自尊心を傷つけられたと感じ、授業に出てこなくなるのだ。ある学生は翻訳しているとき、容姿記述のところを飛ばして訳したこともあった。「人形病」と呼びたくなるほど容姿へのこだわりが異常に強い。

容姿にかぎらず自分に関係したもの、例えば日本や日本人が悪くいわれるのも我慢できない。自分と自分に関係したものへの言及はすべて褒め言葉であるべきだと思っているようだ。王様なみにプライドが強く完璧主義である。自分やものごとを100点か0点のどちらかでしか考えることができず、人間関係も主従関係、上下関係でしか築けない。相手の心を理解したり、自分の心をうまく伝えたりできないため、他人と平等な関係を長くつづけることができない。

そんな若者の目から見ると現実世界は、プライドを傷つける不快な情報が氾濫している絶えがたい世界だ。新聞・本・講義・講演・TV ニュースなどの不特定多数を対象に発せられた情報の中には必ず自分にとって不快な情報がふくまれている。だから、できるだけそんなものは読んだり見たりしないようにして暮らしている。若者たちは現実を遮蔽し、それぞれ勝手に心地よい閉ざされた幻想世界の中で生きている。そんな生き方をしているせいで、一部の学生は驚くほど社会常識が欠けている。学業成績が非常に優秀であるにもかかわらず、今の日本の総理大臣が誰か知らない者がいた。彼らに興味があるのは「自分」に関する「自分」に向けての情報メッセージだけなのである。香山リカもその点を指摘している。

最近、若者の関心が自分自身に限局されている、という話をいろいろなところで耳にする。たとえば、若い人を対象にした映像作品コンテストを開催しても、応募される作品の多くが自分で自分の日常などを撮影したプライベート・ドキュメントなのだという。(p.147)

私が気づいた同様の変化は、一昔前は、学生たちは筆箱に好きな芸能人の写真を貼って楽しんでいたものだが、今は、みんな自分自身の写真を貼って楽しんでいることだ。

自分に対する興味と愛が強い反面、他人には無関心で、同じクラスの学生でも全員の名前を覚えようとか全員とつき合おうとはしない。好きな人の名前だけ覚え、好きな人とだけ付き合う。「身

内」以外の人とは視線を合わさないようにする。視線を合わすと好意か敵意を抱いていると思われるのだ。だから誰かが自分の名前を覚えていたり、廊下ですれ違ったときに挨拶したり、あるいはちらっと自分の方を見ただけで「あの人は私が好きなのだ」と思う。私が「教師」として学生に声をかけたり、何か親切なことをしたり、レポートを褒めたりしても、今の学生は「あの先生は私が好きなのだ」ととんちんかんな勘違いをしてしまう。

この手の誤解でひどい例を一つ紹介すると、教育実習中、実習指導委員であった私はある中学である男子学生の評価授業を観ていたとき、突然、右隣に立っていた女子学生から「先生はこの授業を見るな！隣の教室へ行って」と言われたのである。私はむっとしながら「私は、教育実習指導委員だからこの授業を見る資格と義務がある」と反論したが、その女子学生はなおも怒り狂った獣のような目で私を見つめながら「隣の教室の授業を見ればいいでしょ！この授業は見ないで」と繰り返し言った。その女子学生は評価授業をしていた男子学生の女友達で、彼女は私が彼を真剣な眼差しで見ているのは彼が好きだからで、「先生が私の彼を盗ろうとしている」と勘違いしたのである。何とも重症のキレである……。

今の若者が就職できないのは人間関係能力が低いからなのだ。他人の言動をすべて感情的レベルでとらえる傾向が強い。この短所も香山リカは鋭く指摘している。

……人間関係が職場などの社会的関係なのか、それとも友だちや恋人などプライベートの関係なのかをうまく区別し、自分の感情を使い分けることは、今の若者たちにはきわめてむずかしい。だから相手も同じように自分を感情的に評価しているものと解釈してしまい、面接での人事担当者の「どうしてわが社を志望したのですか」という質問を「この人は私を嫌っている」と感じ、大学の試験での「C」という評価を「先生は私のことがイヤなんだ」と解釈する。「面接官や教員は相手をいちいち好き・嫌いでなんか見ていないよ」と説明しても、「好き・嫌い」でしか人間関係を築けない彼らには、すぐには信じてもらえないかもしれない。(p.57)

好き嫌いだけで人間関係を築く今の若者の多くは、当然のことながら周りの人間や外部世界とうまく繋がっていない。しかし、問題はそれだけではない。実は、かれらは自分自身ともうまく繋がっていないのだ。過去・現在・未来の自分のあいだに連続感がない。自分に都合が悪いことはどんどん忘れ、自分が過去に犯した罪や失敗の責任を取ろうとしない。また、未来の自分のことを思いやり今なにか将来のための準備や努力をするということもない。香山リカは、四年生にしつこく「就職活動を始めるように」と勧めたとき学生全員から「卒業後のことは卒業してみないとわからない」と言われて絶句したと著書の中で書いているが、これは、今の若者たちの頭の中では、卒業後の自分や遠い未来の自分は「他人」として意識されているからなのだ。だから、いくらこちらが必死になって「卒業後のことを考えて今しっかり勉強や就活をきなさい」と説教したところで、学生たち

は「卒業後の自分」という「他人」の利益より「今の自分」の利益を優先し利他的に大学生生活を送る。自分が卒業後、どんな気持ちになりどんなことを望むのかまったく想像できない。彼らの欲求や興味はころころ変わり、卒業後の進路を尋ねられるたびに違うことを言う。自分を一つにまとめ一方に押し進めて行くことができない。記憶力もおかしくなっていて、2ヶ月前に何度も私と会ったのに再会したとき私に関する記憶がすっかりぬけ落ちている人もいた。

精神医学の言葉では、自己の時間的連続性や統合が失われている状態を「解離」と呼ぶ。香山リカは、今の若者が就職できない根本原因は解離性障害にあると見ている。

自己の連続性や統合が失われる、すなわち「私は一つ」「私は私」といった人間にとっての基本中の基本が危機に瀕し、「いろいろな自分がバラバラに存在している」という状態が出現する解離性障害は、九十年代に入ったあたりから日本でも突然、激増を始めたといわれる。一方、それまで一割前後で横ばいを続けていた高校、大学卒業者の無業者の比率が、右肩上がりで上昇を始めたのも一九九一～九二年のことだ。(略)

解離性障害、あるいはそれに近い状態に陥り、自己を連続性を持ったまとまりのある存在ととらえることさえできない若者たちが、将来や就職についてまったくイメージできずに無業に至るケースも、かなり増えていることが推定される。(p.102)

解離性障害者が大量発生する社会的原因は普通は戦争や大災害だが、今の若者は阪神大震災を除けば、そのようなものは経験していない。香山リカは、多くの若者が解離性障害に陥ったのは、親の過剰な愛情が原因で、親が「子供のため」と言いながら実は自分自身のために子供に「自己実現の肩代わり」をさせているからだとして、親たちのエゴイスティクな態度を批判している。

香山リカの見解はおおむね正しいと思う。今の若者は、一人っ子が多い。兄弟がいれば両親や周りの大人の監視度合いが減少し、子供の自立心や自立能力、自我意識が発達するし、兄弟間の相互行為を通して、他人の心を理解する能力や協調性が身に付き、社会生活がスムーズに営める人間に成長する。頭脳力や体力は自分ひとりで伸ばせるが、「心の力」は自分ひとりでは伸ばせない。四六時中、両親から監視され、自分ひとりで「親の期待」という重荷を背負わされ、回りには打ち解けて話をしたり一緒に遊んだりできる人がいない——そんな環境で育った若者の心が壊れていても何の不思議もないだろう。

おまけに解離性障害は世代連鎖しやすい。今、解離性障害をかかえている世代が親になれば、その次の世代の解離性障害者はもっと増えると予想される。自活力のないアダルト・チルドレンの激増をなんとか食い止めなくてはいけないが、教師もカウンセラーも精神科医も、この問題に対してはほとんど無力である。

この難問題に対して、一条の光をなげかけてくれるものは、最近、全国から少しずつよせられる

農業体験を通して立ち直ったニート青年に関する報告である。人間に人間は救えないが、自然には人を再生する力があるという希望がわいてくる。今年、『日本農業新聞』に掲載された記事を紹介する。

第三章 「農」に抱かれて再生した若者たち

鹿児島市 フリースクール「麻姑（まこ）の手村」

（ぬくもり⑤ ひきこもり）

人が怖かった。「ほかの人は自分をどう見ているのか」。いつも、びくびくしていた。

10年前。鹿児島県垂水市出身の川畑雅和（29）は関東地方のアパートの一室で、朝から晩までテレビゲームにふけていた。

入学した首都圏の有名国立大学では同級生になかなか解け込めず、「完全に孤立しているように感じた」。そして最初の夏休みが終わると、とうとう学校に行けなくなった。

スーパーやコンビニエンスストア、ゲームソフトの販売店に出かける以外はアパートに閉じこもった。いわゆる「ひきこもり」の毎日。それを8年間続けた。

「落ち着いている」「大人びているね」。川畑は幼い頃から親類や教師にそう言われてきた。だが、本当は違った。言いたいことは心の中にため込み、神経をとがらせていた。

焦りと不安の毎日。米や衣料が入った荷物が親から届き、心配した母親がたびたび、電話をかけてきた。

ゲームだけが、口下手な自分を忘れさせてくれた。人目を気にせずに済み、現実の煩わしさを感じなくていい。「生きているような、死んでいるような毎日だった」。

2003年9月。新聞広告を頼りに、母親に連れられて鹿児島市フリースクール「麻姑の手村」を訪ねた。「村」では青少年の自立を目的に、農家の田んぼや畑で農業の手伝いをしている。

「『別に』『ハァ』としか言わない。感情を一切出さず、自分を抑えていた」。代表者の卓間光哉（47）は、川畑の第一印象をこう振り返る。

川畑自身、何とかしなければと思っていた。半ば強制的ながら、外に出るチャンスだ。いやいやながら、「村」に通い始めた。

稲刈り、芋掘り、落花生の収穫、草むしり……。いろいろな農作業をしたが、川畑にとっての最大の試練は農家との付き合いだったが。話し掛けられるといつも、「受け答えが上手にできているだろうか」と思った。

だが、作業後に農家から投げ掛けられる「ありがとう」という一言だけが例外だった。こそばゆいような気持ちで受け止めていた。

「こんな自分でも役に立ったのかな」。川畑の中で、何かが芽生えた。⁴

(ぬくもり① 笑顔)

鹿児島県垂水市。川畑雅和(29)は毎朝6時に起き、船で1時間半欠けて鹿児島市のフリースクール「麻姑の手村」に通った。

2003年10月末。同県日置市の農家で、はざ掛けの手伝いをした時のことだ。背が高く、「村」の中では最年長の川畑は、単なる手伝いではなく、はざにまたがって稲を掛ける重要な仕事を任された。

初めての本格作業。稲穂が顔に当たってかゆい。稲の一束は、思いのほか重かった。だが川畑は、一生懸命に働いた。

「また手伝ってちょうだいよ」。作業後、田んぼの縁に座って休む川畑に声がかかった。照れくさくて、ぼそっとつぶやいた。「えー、また？」

みんなが笑い声を上げた。見上げると、おばあさんのしわくちゃの笑顔があった。川畑も一緒になって笑った。

「なにげない一言で、みんなが笑顔になった。忘れられないよ」

かつては、道ですれ違う人の目さえ気になった。農作業を重ねるうちに、そんなことは少しずつ忘れていった。痛い、重い、かゆい、疲れる、しんどい……。そんな当たり前の感覚が心地良かった。

お礼としてもらった米を家に持って帰った。母親は「働いて得た報酬だから、意味のあることだよ」と喜んでくれた。その夜、食卓に上がった米粒の味を、川畑はゆっくりとかみしめた。

「村」代表の卓間光哉(47)は言う。「おばあちゃんと仲良く話していたのには驚いたよ。それからだね、川畑君の表情が明るくなったのは」

川畑と2年半付き合ってきた日置市の農家・堤宏治(58)も「最初は無反応だったけど、このごろはこう手伝いたいなんて言うようになったよ」と成長を実感する。

幼いころから抱いてきた「人が怖い」という気持ちが消えたわけではない。「立ち直ったっていわれるけど、自分ではそう思わない。葛藤は一生続くだろうな」。それが正直な気持ちだ。

でも、と思う。

「心の底では、人とかかわりたいと思っているのかもしれないなあ」⁵

北海道余市町 北星学園余市高校

[ブドウ園① 出会い]

北海道余市町。花きや果樹を栽培する近藤和美(64)の家の前に、約60坪のブドウ園が広がっている。5年前から実をつけ始めたばかりの若い園地だ。

近藤が誇らしげに言う。「ここは順平がたった一人で作ったんですよ」

川崎順平、25歳。暴力、恐喝、喫煙……。大阪で荒れた生活を送っていた少年が同町の北星学園余市高校に通うようになって2年目、19歳の春のことだった。

順平が非行に走り出したのは、中学の終わりごろだ。多感な10台の半ば。「いい大学、いい会社

にはいるのが幸せ」という両親の価値観、母親から強制されるいくつもの習い事。すべてが窮屈に感じた。派出所の窓ガラスを割り、父親と取っ組み合いをして何度も殴った。

「父さんを殴りながら、なんでこんなことになったんだ、誰か止めてくれと思っていた」。自分が抑えられず、もがき苦しんでいた。

幼いころの順平を知る人たちは言う。「正義感が強く、思いやりのある子」。電子オルガン、英語、水泳、サッカー。母親の要求に応えようと必死だった。

「まっすぐな順平を追い詰めていたことに気づかなかったんです」。そう話す母親に対しては「細かいことにまでうるさく干渉し、過保護」と感じ、「父親は威厳がない」と見下していた。

1998年、母親の勧めに応じて北国の学校に入ったのは、順平自身も荒れ果てた生活に見切りをつけたかったからだ。

同校には、謹慎処分の生徒を農家に泊まり込みで研修させる制度がある。入学してすぎの6月。喫煙が見つかり、近藤の畑で1週間の農作業をすることになった。

花苗を植え、わき芽をかき、マルチシートを敷く。盆向け出荷で大忙しの時期。もともと体を動かすことが好きな順平は、一生懸命に働いた。

「小さな芽なのに、花の香りがする」。働く中での何げない発見。そんな感動がうれしくて、自分なりに工夫しながら作業することもあった。

「うちでアルバイトしない？」研修が終わり、近藤の方から持ちかけた。⁶

〔ブドウ園^⑦ 達成感〕

北海道余市町の農家・近藤和美（64）は、北星学園余市高校2年だった川崎順平（25）にブドウ縁づくりを任せた。

順平は重い木を運び、腐らないように1本ずつ根元を燃やして炭化させ、穴を掘り、大地に打ちつけた。

総数およそ300本。順平は毎日、近藤の家を訪れ、日暮れまで作業を続けた。「何も考える余裕はなかった」。太ももはけいれんし、腰に激痛が走る。まさに、生きていると感じる瞬間だった。

3ヵ月後。たった一人で手掛けたブドウ園が完成した。まっすぐに立つ支柱には、鉄線がしっかりと張られている。

「僕が作ったんや」。何ともいえない達成感がこみ上げ、さまざまなことが思い返された。自分を信頼して任せてくれた近藤への感謝の気持ち、たくさん泣かせた親の顔、やりきれない思いをかかえながら荒れた日々――。

「順平、本当に頑張ったね」。近藤が拍手を送った。両親と祖母が大阪からやって来た。母親は、ブドウ園を見て泣いた。

順平はその後、近藤とともに苗木を植えた。

1年後。無数に咲いた白い小さな花は、それまでに見たどんな花よりも美しかった。

他人を傷つけ、後悔も恥ずかしい思いもたくさんしてきた。だが、そんな自分が苦勞してつくったブドウ園で、小さな花が誇らしげに咲いている。

はっとした。「農業は命をつくっている。人間は、その命をちょんぎって食べているのか」。大切に生きることの意味が少しわかったような気がした。

今年6月。順平は同校に、教育実習生として戻った。ブドウ園は、大学4年生になったいまも順平の心を支える。

「このブドウ園は、自分が自分であることの証みたいなものだ。ちょっと照れくさいけど、ずっと実をつけ続けるブドウのように僕も生きていきたい」

順平は同校の教師になりたいと夢を描く。迷いもがいている生徒がいたら、このブドウ園を見せよう。順平はあらためて、強く生きようと誓った。⁷

富山市 「ピースフルハウス・はぐれ雲」

〔はぐれ雲① 忘れ物〕

「やせていくのが快感だったんや。まだまだやせてられるって」

2001年、大阪府。当時高校1年のナホ（19）は、仲間とシンナーを吸い続けた。

155㌔、36kg。ほとんど食事をとらず、体重はどんどん落ちた。病みつきになり、我慢できずに駐車場で吸っていたところを見つかり、4度目の補導となった。

ろれつが回らない。手が震えて字が書けない。足がもつれて階段を上れない。典型的なシンナー依存症だった。少年鑑別所行きが決まった。

「世の中がかつたるくて、退屈やった。どうでもいい、全部ばからしいって感じやった」。ナホは鑑別所で1ヶ月を過ごした。

今年2月。ナホは母親の勧めで、富山市の農家・川又直（50）が立ち上げた「ピースフルハウス・はぐれ雲」に行くことになった。非行、不登校、引きこもりなど、社会にうまく適応できない少年や若者が親元を離れ、農作業をしながら立ち直っていくための施設だ。

初日の夕飯時。シンナーをやめて1ヶ月以上たつのに、みそ汁がうまく運べない。「やばい。このままやったら、どうなるんや」。恐怖感がナホを襲った。

都会育ちのナホにとって、農業は「不思議な存在」だった。だが、「黙ってやるときゃ、はよ帰れる」という軽い気持ちで取り掛かった。

雪解けが近づいた3月。初めて、堆肥づくりをした。強烈なおいがナホの鼻をつく。「むっちゃ臭いし汚い最悪やん!」。逃げ出したい思いに駆られた。

シンナーを吸い、恋人や仲間とバイクに乗り遊びまくった日々。そのころのナホは、コンビニのおにぎり一つさえ食べることができなかった。しかし、堆肥作りの後、何年かぶりにおなかがグーと鳴った。

「おなががすくなくて何年ぶりやろ。食べんでも生きていけると思ってたのに」。ナホはその日、夕食を全部平らげた。心の底から、「ご飯って、めっちゃ、うまかったんやな」と思った。

朝早く起き、農作業に取り組み、食事をしっかりとる。いつの間にか、ナホの体はシンナーを忘れていた。⁸

〔はぐれ雲[Ⓐ] きずな〕

富山市の農家・川又直（50）の「ピースフルハウス・はぐれ雲」に来てから、大阪府出身のナホ（19）の生活は激変した。草むしり、肥料作り、種まき、植付け……。毎朝6時には起き、農作業を次々とこなした。

手足が汚れる。畑には、苦手な虫がいる。汗で化粧が落ちる。一緒にシンナーを吸った仲間はいない。毎日、ひどく疲れた。

だがナホは、逃げ出さなかった。「なんていうか、農業してる時は無の心なんや。それに、自分の体が変わってきている。腕に筋肉が付いたんやで」。ちょっと自慢げに話す。

作業の最中にほおをなでる風が心地良い。作業後の食事が待ち遠しくなった。「はぐれ雲」に来てからの半年間で体重は約10^{kg}増え、顔もふっくらしてきた。

「ご飯がほんまに美味しいと、素直になれるんですよ。人間って、単純やな」

もともと人なつっこいナホは次第に近所の農家や「はぐれ雲」の仲間と打ち解け、自分の過去を冷静に振り返るようになってきた。幼い頃、寒い夜には一緒に寝てくれた父、母を泣かせてしまったことが悔やまれる。

「家族はあたしのこと見捨てんかった。ほんまにありがたい」。素直な気持ちを、家族への手紙につづった。はたから見ればナホはすこぶる明るい。地域にもすっかり溶け込み、問題は感じられない。だが、闇の中をさまよう何人もの子どもと向き合ってきた川又はこう言う。

「子どもにとって、社会の壁はとてつもなく厚い。ゆっくり、少しずつ、壁を取り除いていかないと。ナホはいま、その作業をしている最中だ」

まわりに流されやすく甘えん坊——。ナホは自らをそう分析する。シンナーを始めたのも、当時付き合っていた同い年の恋人に勧められたのがきっかけだった。周囲に流されずにいられるかどうかまだ自信がないが、変わってきたのは確かだ。

「秋には米を収穫して、家族に食べさせてあげたいんや。喜んでくれるやろな」⁹

ニート青年の更生以外に、ファームステイは都会の子どもたちに食べものと自然に感謝する気持ちをもたせる体験学習として効果をあげている。

長野県八坂村 八坂美麻学園

農村生活を味わうことのできる山村留学を行っている。1年間、地元農家や学園で生活し、田畑を耕し動植物と触れ合い、旬の食事をとる。農家からは地域の伝統や農作業の方法を学ぶ。大自然

の中で子どもたちは人間付き合いや食のありがたさを知っていく。

<食べ物に感謝の心>

食事を残さない、感謝する、我慢する、たくましくなる……。ゲームもコンビニエンスストアもない山村生活で、子どもは1カ月もすれば大きく変わっていくという。

横浜市の森智紀くん(11)は「横浜ではお金があれば何でも食べられた。でも、村で野菜がどういうふうに分られるかを知り、その苦勞も知った」。学園では毎食前に黙禱の時間がある。そこで森くんは必ず、農家と食べ物に心の中でお礼を言うという。

学園の設立から30年。山村留学を経験した子は親になり、その子どもが学園に来ている例もある。子どもは都市部に帰っても農家と家族ぐるみの交流を続ける。

森くんは「村には都会にないものがたくさんある。都会では学べないことがいっぱいある。大人になっても村のことは絶対に忘れない」という。

<食育への思い>

現代の食事は餌のようだ。ここで生活すれば、空腹を感じなかった都会の子どもも、食欲が増し体力がつき職が生きることに必要なことだということを知るようになる。食事、農作業だけでなく生活習慣や農村文化などすべてが密接にかかわってこそ本当の食育といえるのではないか。

学園指導員、野高健司(34)¹⁰

三重県伊賀市 「伊賀の里モクモク手づくりファーム」

食農学習の場を年間として毎週子どもたちに提供している。農作業から調理、自然体験のキャンプ、食品加工など、内容は盛りだくさん。自然いっぱいの環境の中で、子どもたちは食のありがたみを体で感じる。家や学校でも、手伝いをよくするようになり、給食も残さず食べるようになった。

<牛や野菜にも個性>

キャンプに参加した三重県四日市市の福山遼大くん(12)は、「当たり前だけれど、牛には1頭ずつ性格がちがう。手をなめる牛や優しい牛。野菜もひとつひとつ、生え方、葉の形、においが違う。人間と一緒になんや」と感心した様子だ。

ハキハキと話す、自主的な行動が増える、食べ物を残さない……。同ファームには、参加者からこうした声が寄せられているという。

<食育への思い>

野菜でも命があることを感覚でつかんでほしい。そのために、食育について大人がもっと勉強していく必要があると思う。若手ばかりでまだまだ勉強不足なので、今後地域の人ともつながりを深めた食育を提供したい。

伊賀の里モクモク手づくりファーム広報担当 松田明子(27)¹¹

終章

教育で最も基本となるものは偉大な神秘に対する愛，自然に対する愛，人と国に対する愛だといわれている。¹² この基本を，街の中にある学校で教えることはできない。「自然」という開かれた学校の中に人間が入っていくしかない。農業は，大地，空，水，大気，動植物，虫，微生物，天候等すべてものと結びついている。農業をしていると人間が自然に健康な状態にもどる理由は，失った自然との繋がり，「万物は繋がっている」という感じを取り戻すからだ。農業は，「キレイている」人のための自己セラピーや仕事として最良のものであると思う。自分と外部世界の壁が消えていくような快感を経験するからだ。キレイている人間の最大の特徴は，自己中心性である。自己中心性とは，全体の無視であり，関係がわからないということで，当然他のものとの心の触れ合いがない。だから生きるエネルギーが湧いてこない。農業をやっていると自然に全体の中での自分を考えさせられる。

『アメリカインディアンの教え』（加藤諦三著）という本が大ベストセラーになったことがある。アメリカインディアンの宇宙観は，‘Earth is my mother. Sky is my father’（大地が私の母，天が私の父）そしてすべての生き物はみな兄弟というものだ。両親である大地と天の恵みに素直に感謝しながら他の生物とともに「自然の子」として楽しく生きるというシンプルな思想に多くの日本人が共鳴した。窮屈で不健康な人間社会・人間家族から脱け出して，短い間であっても，「自然家族」と暮らすことは病んでいる現代人の生存本能を高めるために必要にちがいない。われわれの文明化された脳の最大の問題は，進化の先端の前頭葉だけがつねに過労状態で，それ以外的大脑旧皮質や脳幹の部分が抑圧された休止状態にあることである。アメリカインディアンのようなスケールの大きい家族観を持ち，泥にまみれ，汗を流し，有機肥料の悪臭をかぎつつ屋外で農作業をすれば，たいいてい人は脳も体も鍛えられ健康になるだろう。農業は，けっしてすべての人を救う万能薬ではないが，都会人に対して，動禅や気功と同じように一種の体育療法として機能すると思う。文明の牢獄の中で日本人は病み，未来の担い手である若い世代が特に弱くなってしまった。日本はこれからは衰退の一途をたどるのではないかと不安になる。しかし，グリーン・ツーリズムが外の自然と出会う生命の場を提供してくれる。遊びや勉強として農業が日本人の間に広まれば，まだ「間に合う」かもしれない。

結辞

グリーン・ツーリズムの教育的価値は実際に体験してみないとわからないので，これから学生と一緒に県内外の施設をできるだけたくさん回ってみるつもりである。この論文を執筆するにあたっては，多くの諸先生の優れた論文・著書を参考とさせていただいた。学恩に深く感謝する。最後に参考文献として挙げさせていただくことでお許しを得たい。

参考文献

- 田島康弘著「新しいツーリズムによる地域振興—九州中央山地におけるワーキングホリデーの検討—」『鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会学編)』第56巻, 2005年。
- 前田勇編著『現代観光総論』, 学文社, 2001年。
- 青木辰司著『グリーン・ツーリズム実践の社会学』, 丸善, 2004年。
- 多方一成著『グリーン・ツーリズムの文化経済学』, 芙蓉書房, 2000年。
- 日本観光協会編『観光セミナーサブノート』, 日本観光協会, 1998年。
- 深谷昌志著『無気力化する子どもたち』, NHK ブックス, 1990年。
- 加藤諦三著『アメリカインディアンの教え』, ニッポン放送, 1990年。
- 津村喬著『気功=心の森を育てる』, 新泉社, 1994年。

引用

- 1 香山リカ著『就職がこわい』, 講談社, 2004年, pp.17-19.
以下この著書からの引用は()内にページ数を標した。
- 2 諸星ノア著『ひきこもりセキララ』, 草思社, 2003年。
この著書からの引用は()内にページ数を標した。
- 3 小島貴子著『わが子をニートから救う本』, すばる舎, 2005年, p.70.
- 4 『日本農業新聞』2005年7月26日(1)
- 5 『日本農業新聞』2005年7月27日(1)
- 6 『日本農業新聞』2005年7月20日(1)
- 7 『日本農業新聞』2005年7月21日(1)
- 8 『日本農業新聞』2005年7月22日(1)
- 9 『日本農業新聞』2005年7月23日(1)
- 10 『日本農業新聞』2005年5月19日(18)
- 11 『日本農業新聞』2005年9月8日(16)
- 12 加藤諦三著『死ぬことが人生の終わりではないインディアンの生きかた』, 扶桑社, 2001年, p.147.